

後期・終末期古墳からみた関東地方の地域編成

—下野地域の検討を中心として—

草野 潤平

古墳時代から律令時代への過渡的段階に当たる7世紀において、列島の各地域社会は畿内政権が推進した国家形成に向けての施策を受け、在地的な枠組みの解体を迫られた。とりわけ列島屈指の終末期古墳が数多く造営された関東地方の場合、律令社会への変質過程を描くにあたって、前時代的モニュメントである墳墓の分析は避けて通ることができない。本発表では、在地色が強く畿内地域との関連が稀薄な下野地域南部をケーススタディとして検討を行う。

当該地域に関する既往の研究では、思川・田川水系という比較的大きな地域的範囲のなかに大型古墳の営まれた箇所が複数存在すること、またそれらの首長墓が「下野型古墳」と定義される独特な墳墓様式によって結びついた強い同盟関係を示していることが論じられている（秋元・大橋 1988）。さらに中小規模古墳も含めた悉皆的な古墳集成をもとに古墳のまとまりを抽出し（古屋ほか 2005）、各単位地域の墳形・墳丘規模構成や首長墓・群集墳の築造状況を通覧すると、古代の郡領域に対応するような地域圏の存在に気づかされる（草野 2007）。すなわち古墳時代の地域的まとまりを温存するかたちで、後の郡（評）域が設定されたと捉えることができる。国造領域の解体および行政的地域区分の編成を企図した評制施行が孝徳朝において難航し、当該地域では7世紀第3四半期後半に至って評衙の成立をみた可能性が指摘されている点を勘案するならば、如上のような郡（評）域の設定原理は在地首長層の懐柔策として案出されたとも考えられよう。

ところで、評制に先立つ国造制施行段階の考古学的事象として、前方後円墳消滅後の大型方・円墳の築造が重要視されている。下毛野国造の奥津城は、思川流域に営まれた直径82 mの壬生車塚古墳をあてる意見（白石 1990）が主流であるが、田川流域に位置する同規模の円墳として下石橋愛宕塚古墳の存在が注目される。墳丘形態・石室構造の共通性の高さから両古墳が有意な関係をもって築造された点に疑いはなく、また下石橋愛宕塚古墳に近接する御鷲山古墳の存在をも考え合わせると、下石橋愛宕塚古墳が壬生車塚古墳の築造に際して影響を与えた国造墳墓である可能性が考えられる。国造が単なる在地首長ではなく、畿内政権に任命された地方官としての性格を有する点を念頭に置いたうえで改めて古墳分布状況を見てみると、壬生車塚古墳が位置する都賀郡域では拠点的な偏在性が目立つのに対して、下石橋愛宕塚古墳が位置する河内郡域では拮抗する勢力の分散傾向が窺える（草野 2007）。後者の状況を畿内政権の入り込む余地があるものと評価したい。

7世紀後半になると、同じ河内郡域に極めて畿内的様相の強い多功大塚山古墳が営まれ、以後それまで隆盛を誇っていた都賀郡域を含め墳墓造営が停滞してしまう。こうした状況は上野地域などの古墳消滅過程と異なり、地域毎の実情を斟酌した比較検討が必要である。

キーワード：後期・終末期古墳、国造制、評制

[資料]

はじめに

①報告者の研究課題と本報告の目的

- 古墳時代から律令時代への過渡的段階に当たる7世紀史の実相解明
- 国家形成を推進した王権中枢部ではなく、社会変化の時代にあって対応を迫られた地域社会、とりわけ当該期において列島屈指の終末期古墳が数多く造営された関東地方を対象領域とする。
- ケーススタディとして、下野地域の政治的中枢である栃木県南部を取り上げる。

②下野地域における後期古墳の特色

- 独特な首長墓様式の地域的展開：「下野型古墳」の提唱（秋元・大橋 1988）
 - ・「基壇」と呼ばれる幅広で低平な墳丘第1段／埋葬施設を前方部に設ける（第1図）
 - ・共通した企画による築造→首長連合とも目される強い同盟関係の存在を想定
- 後期古墳の埋葬施設の系譜が畿内以外：切石組石室の遡源候補は出雲・伯耆・九州墓室内への土器埋納が基本的に認められない：新来の黄泉国観念に基づく儀礼の欠如
 - 6世紀後半～7世紀前半にかけての墓制に畿内の影響が稀薄（土生田 1996）

③研究史の概観と問題の所在

- 首長墓の立地・動向に注目した地域設定（秋元・大橋 1988 ほか）
 - 問題点：中小規模古墳も含めた地域相の把握が必要
- 大型古墳の集中域に営まれた壬生車塚古墳を下毛野国造の墳墓と想定（白石 1990）
 - 問題点：7世紀後半に田川流域が政治的中枢として機能することと矛盾

1. 下野地域における後期・終末期古墳の地域的まとめ

①下野南部の悉皆的な古墳集成：学術フロンティア推進事業の一環（古屋ほか 2005）

- 思川・田川水系の東西20km×南北30kmの範囲に1000基以上の古墳が存在（第2図）
- 古墳の分布状況、地形区分にもとづき、A～Yの25単位地域を設定（第3図）

②25単位地域の古墳の内容を分析：様相の違いから3つの地域圏を抽出（草野 2007）

- 【分析1】墳形・墳丘規模の単位地域別比較
 - ・前方後円墳の分布状況の違い：集中する思川水系と分散する田川流域（第1表）
 - ・大型古墳（60m以上）の分布状況、中小規模古墳の築造状況の違い（第4図）
- 【分析2】首長墓の築造状況
 - ・5世紀段階から6世紀前半にかけて連綿と営まれた首長墓系列の存在
 - ：国分寺地域（D），寒川地域（I），東谷・磯岡地域（T）を核とする（第5図）
- 【分析3】群集墳の築造状況
 - ・同一群集墳で竪穴系埋葬施設から横穴式石室へ継続的に移行する事例の存在
 - ：飯塚古墳群（D），牧ノ内古墳群（H），琴平塚古墳群（T）など（第5・6図）

※3つの地域圏が古代の郡領域【都賀・寒川・河内】に対応（第7図）

2. 首長墓石室の展開過程

① 壬生車塚古墳（直径 80 m）の位置づけ

- 前方後円墳消滅後の大型円墳で、大型古墳の集中する思川流域に位置（第 8 図 2）
- 墳丘形状・規模・石室の共通性から、田川流域の下石橋愛宕塚古墳との関連性が強い
- 御鷲山（S：6 c 後半）→下石橋愛宕塚（Q：6 c 末葉）→壬生車塚（C：7 c 前半）

② 削り抜き玄門を有する切石組石室の展開過程

- 古段階に位置づけられる吾妻岩屋古墳（D）と上三川兜塚古墳（V）の前後関係・玄門の特徴から上三川兜塚の先行性を指摘する見解がある（中村 1996）

※ 石室の展開過程からは、下石橋愛宕塚古墳を下毛野国造とする可能性も考えられる

3. 多功大塚山古墳の成立とその後

① 多功大塚山古墳（R・7 c 第 3 四半期）の異質性（第 9 図）

- 墳丘形態：一辺 54 m の大型方墳
- 石室形態：ブロック状切石を積み上げた横口式石槨
→ 鉄釘出土から想定される木棺使用も含め、畿内的様相が強い（秋元 2005）

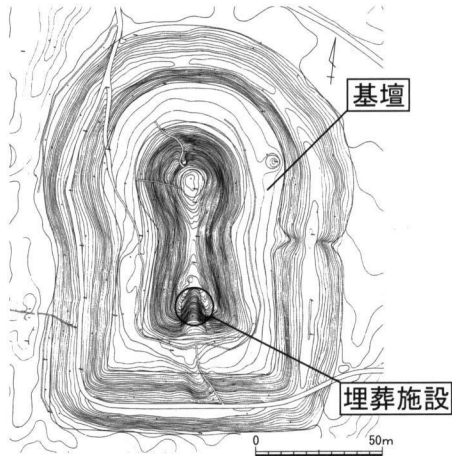
② 7 世紀後半の墳墓造営が停滞（上野地域や南武蔵地域における古墳消滅過程との相違）

4. 結語

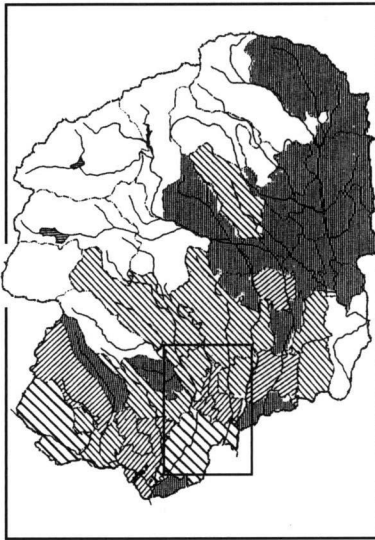
- 関東各地域における 7 世紀史の多様性：地域毎の実情を念頭に置いた比較検討が必要

【参考文献】

- 01) 秋元陽光 2001「栃木県における円筒埴輪編年（試論）」『埴輪研究会誌』第 5 号 pp.1-6
- 02) 秋元陽光 2005「上三川町多功大塚山古墳の再検討」『古代東国の考古学』大金宣亮追悼論文集 慶友社 pp.61-71
- 03) 秋元陽光・大橋泰夫 1988「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向—思川・田川水系を中心として—」『栃木県考古学会誌』第 9 集 栃木県考古学会 pp.7-40
- 04) 草野潤平 2007「下野における後期・終末期古墳の地域設定と動向」『関東の後期古墳群』六一書房考古学リーダー 12 pp.55-70
- 05) 白石太一郎 1990『関東地方における終末期古墳の研究』平成元年度科学研究費補助金（一般研究 B）研究成果報告書
- 06) 中村享史 1996「鬼怒川東岸域の横穴式石室」『研究紀要』第 4 号（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター pp.21-48
- 07) 土生田純之 1996「葬送墓制の伝来をめぐって—北関東における事例を中心に—」『古代文化』第 48 巻第 1 号 pp.1-17
- 08) 古屋紀之・草野潤平・五十嵐祐介・西島庸介 2005「関東における後期・終末期古墳群の地域動態研究—下野南部を対象とした古墳集成—」『古代学研究所紀要』第 2 号 pp.141-205



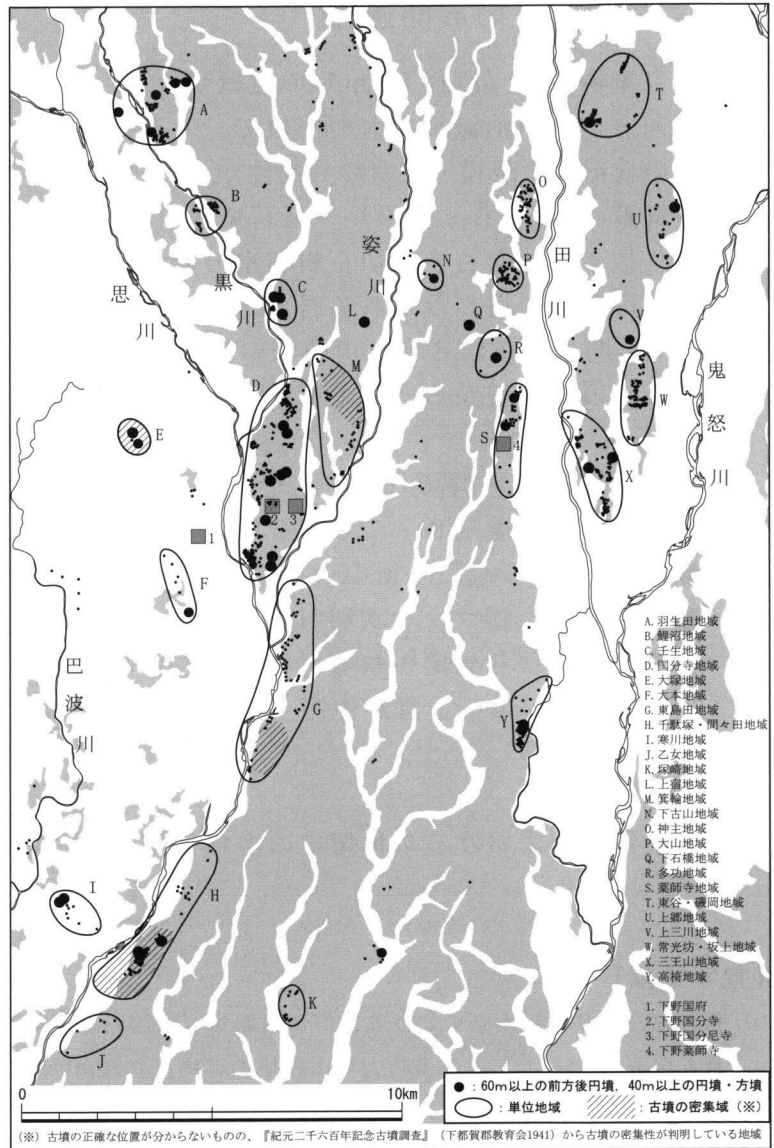
第1図 下野型古墳の特徴（吾妻古墳）



\\\\\\\\\\\\\\\\\ 250以上
 \\\\\\\\\\\\\\\\\ 151~250
 \\\\\\\\\\\\\\\\\ 51~150
 \\\\\\\\\\\\\\\\\ 10~50

（秋元2001を一部改変）

第2図 栃木県の古墳分布状況

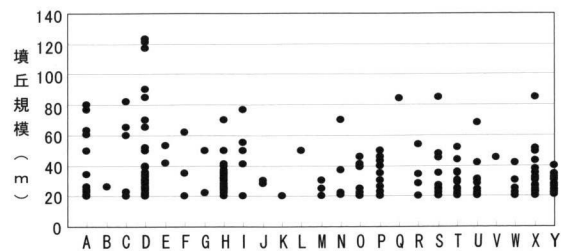


第3図 下野南部における後期・終末期古墳の分布

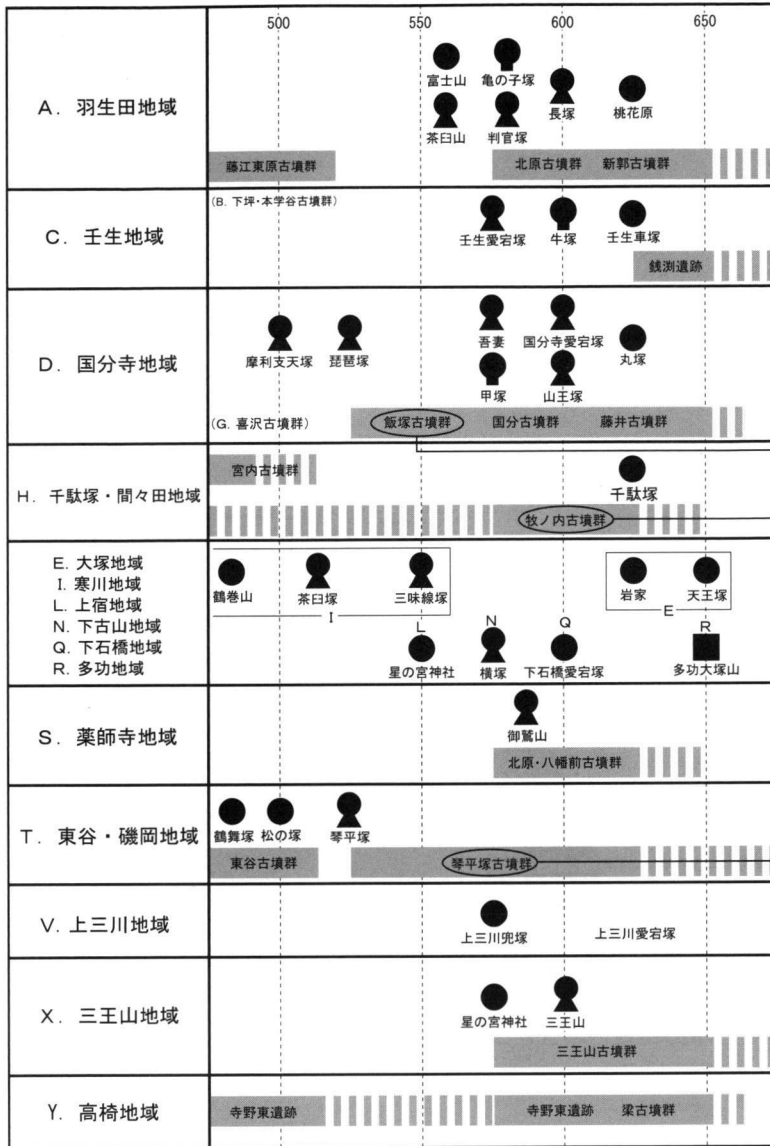
第1表 各単位地域の墳形別古墳数（時期不明古墳を含めた数）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	計
前方後円墳	7	0	2	23	0	2	1	2	3	2	0	0	0	1	4	4	0	0	2	6	3	0	5	3	5	75
円墳	63	34	6	175	5	3	49	54	2	4	13	1	32	2	32	29	1	3	21	35	18	1	58	80	26	747
方墳	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	4	0	0	2	0	0	3	0	0	0	3	15
墳形不明	1	0	7	11	1	0	0	9	5	2	0	0	0	1	3	9	0	0	3	1	3	1	6	0	11	74
計	71	34	15	209	6	5	51	67	10	8	13	1	32	4	43	42	1	5	26	42	27	2	69	83	45	911

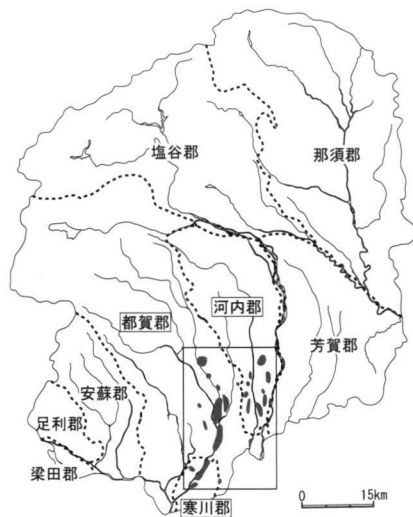
※帆立貝形古墳は前方後円墳に含める



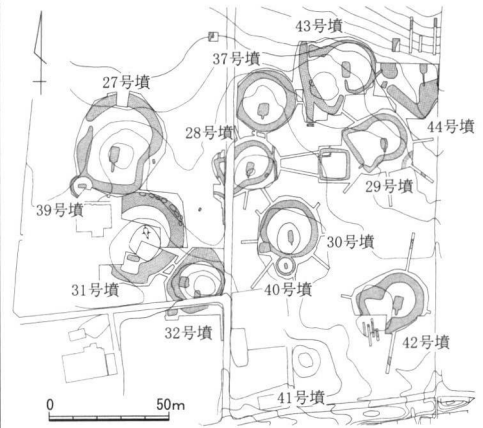
第4図 各単位地域の墳丘規模構成（20m以上）



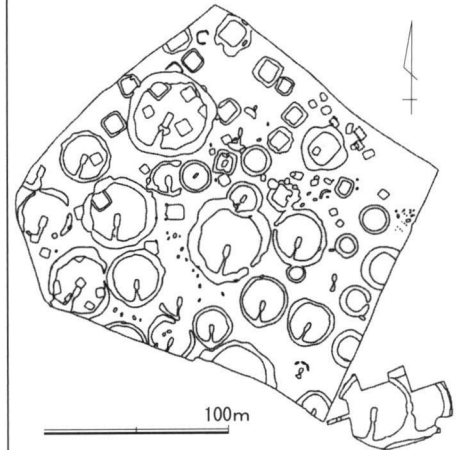
第5図 各单位地域における首長墓・群集墳の消長



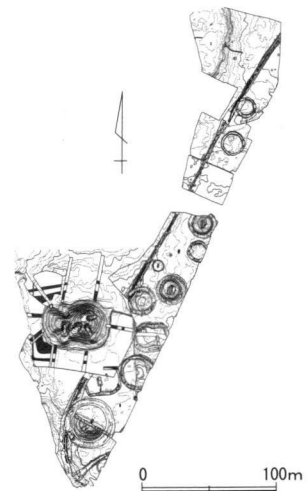
第7図 古墳分布と律令時代の郡領域



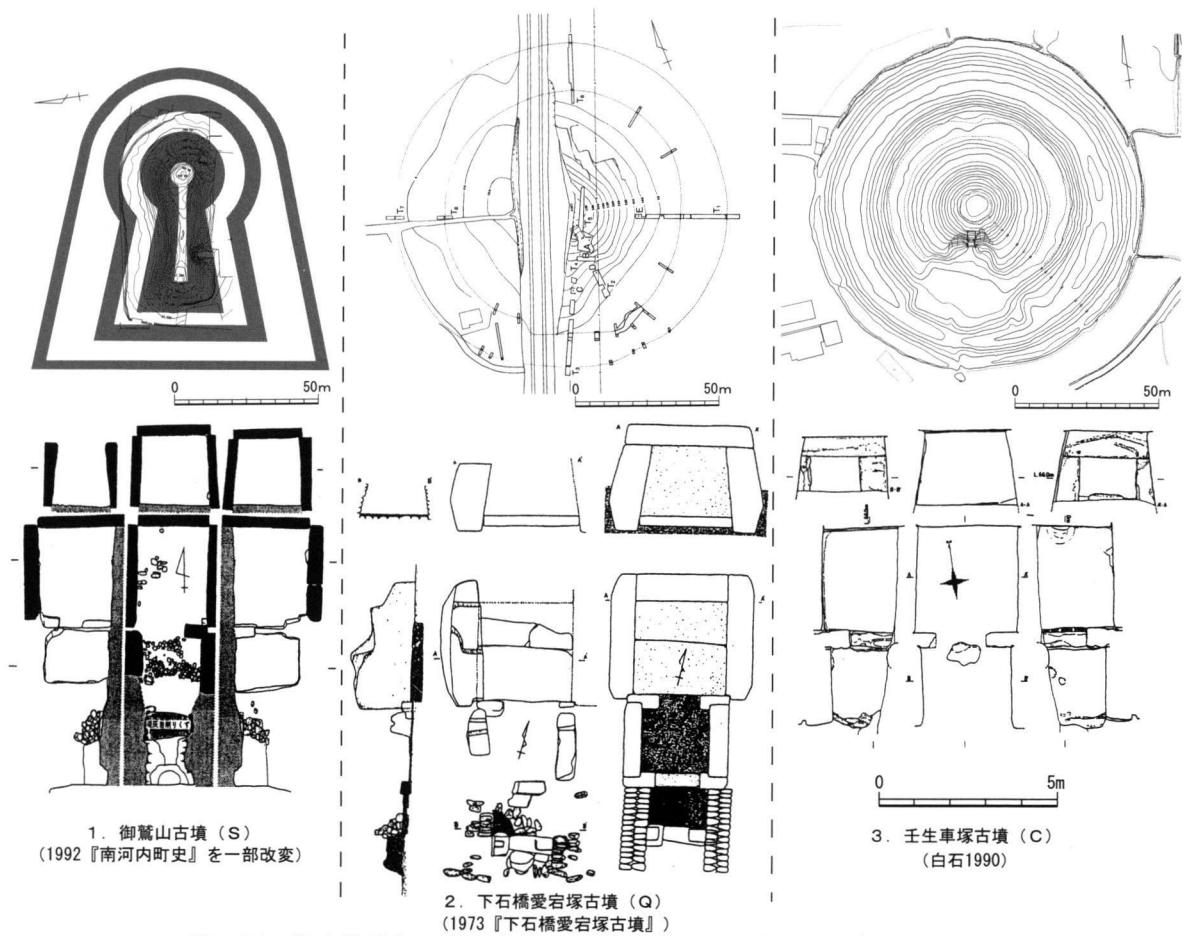
1. 飯塚古墳群 (D)
(1999『飯塚古墳群Ⅲ』)



2. 牧ノ内古墳群 (H)
(1997『牧ノ内Ⅰ』)



第6図 縦穴系埋葬施設から横穴式石室へ
継続的に移行する群集墳



第8図 複室構造切石組石室墳の比較 (墳丘1/2500・石室1/200)

